

「生命と生活の質特論」のめざすもの

山口県立大学大学院における教育実践の報告
Quality of Life : a Multi-disciplinary Lecture in the
Graduate Schools of Yamaguchi Prefectural University.

安溪遊地*
Yuji Ankei

いのちの危機の時代を生きる

かつて、私は、あるオムニバス講義の趣旨を次のように書いた(安溪, 1993: 3).

今日うまれた子どもたちが成人する2012年に、われわれの地球はいったいどうなっているのでしょうか。そのとき、われわれは、健全な水と空気と土を、彼女らや彼らに手渡せるのでしょうか。……ゆたかな、おもいやりのある心のひろがり、人と人にも地域にも満ちているのでしょうか。さまざまな差別と貧困や病いに苦しむ人々はもういなくなっているのでしょうか。……今まさに、われわれは、「いのちの危機」の時代を生きています。21世紀の到来を目の前にして、この地球とともに生き、これから生を享けていくことになる、人間を含むすべての生命にたいして、わたしたちはどのように考えていったらいいのでしょうか。

「いのちの危機」の時代についてのこの問いかけは、今もその切実さを増している。そして、このような地球規模の危機を解く鍵が、実は日常のなにげない暮らしの中にこそあることに、講義やささやかな実践を通して気付くことができたのは幸いであった。その経験から、今ではいのちの危機と生活の危機は、ひとつのこととして捉えることができると考えている。そのことを総合的に問いなおすために、生命と生活の質を中心に据えた、生活者の視点にたったあたらしい学問体系が緊急に必要とされているのである。新しく県立大学に設置される大学院の講義の中で、それに答えようとするのが、この「生命と生活の質特論」であった。

橋をかける

いわゆる地球環境問題を、理科系の学問の守備範囲で解こうとする試みが失敗に終わって、ようやくそれが人間のもつ文化の問題でもあるということが気づか

れるようになった。こんな時代だからこそ、理科系と文科系の学問領域を総合するような大学院が欲しいと思った。そんな私の願いは、専門の壁を乗り越えて、ふたつの研究科から教員が出て行なう「生命と生活の質特論」となった。

ふたつの研究科(3つの専攻)の全員が必修科目として受講するオムニバス講義を、大学院へのオリエンテーション的な集中講義として合宿で行なうというのが、当初の計画だった。

1999年と2000年の、始めの2年間の世話人として、その講義の記録を残しておくことにしたい。

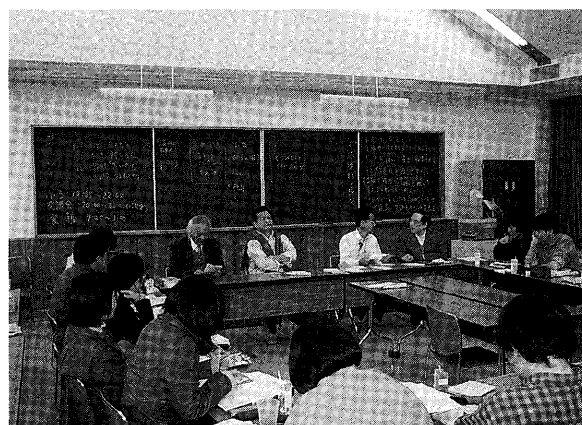


写真1 教員どうしのぶつかりあいも楽しめる。オムニバスの討論。(2000年 徳地町)

担当予定教員8名への呼びかけ(1998年5月12日、実施1年前)

健康福祉学研究科と国際文化学研究科からそれぞれ4人ずつの教員が出て、合計8コマの講義を行うことを計画して、文部省への申請書類を作成するとともに、事前に研究内容の相互理解を進めることを企画した。

「生命と生活の質特論」の講義概要執筆のお願いと「QOL研究会」(仮称)への参加のお誘い

* 山口県立大学大学院 国際文化学研究科

山口県立大学の大学院共通科目として、「生命と生活の質特論」2単位が計画されています。これは、私たちのとりくみしだいで案外なかなか興味深いものになる可能性を秘めているのではないのでしょうか。

同じ研究仲間だけを相手にする研究生活（俗にたこつぼぐらしというそうです）をひととき忘れて、理科系と文科系の両方に橋をかけ、いろいろな専門分野の交流をはかりつつ、研究、教育というとなみを捉えなおしてみることは、予想以上に実り多いものです。

具体的には、大学院の1年生を迎えて、1泊2日で、山口県内の風光明媚なところで合宿して学際的な討論を主体とするゼミを展開してみたいのです。それによって、学際的な討論のわくわくはらはらするような楽しさを、早い段階で大学院生たちにつたえてオリエンテーションとし、あわせてどんな初歩的な、専門的でないような質問をしてもいいんだ、ということを受容しあうだけでもずいぶん大きな収穫になると考えています。

こんど文部省に届け出る人数通りなら学生は21人、教員はのべ8名の予定です。教員は、最低でも、話す人とコメントする人、コーディネーターの3人が参加することとしますが、ボランティアの教員の飛び入りは大いに歓迎しましょう。例えば、岩田学長にわが大学が大学院をもつに至る道筋をたどりつつ「なぜ人間は学ぶのか——21世紀の宮野に描く夢」というような全体をまとめる話をしてもらってもいいのでは、と勝手に思っています。

丁々発止と議論が飛び交うようなゼミ。学生は、びっくりして黙っている人が多いけれど、二日目には、ぼちぼち話をはじめ、ゼミをやる場所の地元の人も飛び入りで話しはじめて、場合によっては、みんなで外へ出かける。そんなことができたなら面白いと思います。移動は、大学のバスを利用し、宿泊にかかる費用は、予算に応じて無料の施設での自炊的な滞在から温泉リゾートまで、さまざまございましょう。

大学院が認可されたら、研究会をもって、オムニバスのゼミの本番に備えることにしたいと思います。

さて、急を要する話に入ります。文部省に提出する書類に載せる授業概要づくりです。全体をまとめるあらましを、安溪が作文してみました。

そのあとに、担当者として名前があがっている先生方のそれぞれの担当部分という形にするものようです。前半でご専門の土俵での論を展開していただき、後半では、そこから一歩ないし数歩踏み出していただいて、「ここで、いま、いまから」という視点で自由に論議を交わしたいというもくろみです。土俵の外に出るのですから、全員が「負け」それでいいと思うのです。ご参考までにたこつぼの外にでるための「モード2」の科学（あつまって問題解決型のプロジェクトを行ない、さっと解散する）を紹介する新聞記事を添えておきます。

オムニバス講義の目標と役割分担

暮らしの向上が経済の量的な拡大と直結して理解されていた時代が終わり、ボーダーレス化が進行するなかで、地球環境問題や、極微量で次世代の生命をおびやかす環境ホルモンの影響など、既存の学問体系のわくの中では解決の見通しがつきにくい課題がわれわれをとりまいている。環境と人間の尊厳をそこなうことなく生命と生活の質（quality of life, QOLと略記）を向上させるための真の智慧を求めて、理科系と文科系の学問の壁を取り払った自由な発想と討論によって、学問研究のはたすべき役割を学生とともに模索するのが、このオムニバス講義の目標である。コーディネーターの役割を果たす教員の司会のもとに、主として生命の質の視点から論ずる教員と、主として生活の質の視点から論ずる教員の双方が同時に参加するゼミナール形式の講義とする。

・市村孝雄（健康福祉学研究所）「化学物質に侵食されるQOL」

人間を形づくっている諸器官の構造と機能を紹介し、石油文明が生み出した膨大な種類の化学物質がそれぞれの器官の機能に深刻な影響を与えている実例を示す。食品添加物や新築の住居に含まれる有害物質などが神経系に作用して、わずかなきっかけでも「切れやすい」人格をつくっているという可能性についても論ずる。

・三島正英（健）「子どもの発達とQOL」

人がいかにして子どもになり、そして大人になっていくのかを発達心理学ではどのように捉えるのかを紹介し、学歴偏重の競争社会の病理が生み

出しているさまざまな歪みの実例を示す。東洋と西洋の子どもたち発達過程の対比の上になつて、わが国の子どもたちをとりまく社会的な環境がいかにあるべきかを論ずる。

・岩本晋（健）「疫学からみたQOL」

PCBやフロンなどの人間が生み出した物質が、人々をとりまく環境や生活習慣から人体に取り込まれ、健康を害するという例をいくつか示し、誰もが安心してくらせる健康な環境づくりと、そのための学問の責任について論ずる。

・鈴木和雄（健）「生活環境をどう評価するか」

植物と昆虫が生存のために相互に依存しあうシステムをつくりあげてきた共進化の実例を紹介し、人間の活動による環境破壊によって生態系がどのような変化を被るのかを説明する。絶滅危惧植物などの生物を指標として生活環境の質を推定する方法などについても論ずる。

・松井範淳（国際文化学研究科）「第3世界におけるQOL」

今日の世界が、エネルギーと資源の浪費と飽食を前提にする少数の国家群と、飢餓と貧困に苦しむ人々からなるいびつな構造をもつ社会システムでおおわれていることを事例をまじえて示し、そのシステムとグローバルな経済の関連について示す。マスコミ等で流される第3世界の状況とそこでの現実の生活のギャップと、地球レベルでの「生活の質」の確保の重要性についても論ずる。

・安溪遊地（コーディネーター、国）「アフリカの森のQOL」

アフリカの森林地帯に住む人々の生活を紹介します。そこでは、自給自足を原則とし、物々交換によって隣り合う民が助け合い、再生不可能な資源やエネルギーをほとんど使わない生活が成り立っていることを示す。そして伝統の智慧に支えられた高い生活の質も、プライマリーヘルスケアの低下とともにかげりを見せている現状を論ずる。

・戸崎宏正（国）「古代インド社会のQOL」

生病老死の四つの人間的な苦悩からの解脱を求めて、古代インド社会にはさまざまな宗教が起こったが、ヒンドゥー教と仏教の教典を読み解いて

いくと、当時の人々の生と死についての考え方の中に、現代日本人とは対極をなすものを見いだすことができる。そして、一概に現代の方が生命の質が高いとは言えないことを指摘する。

・竹野静雄（国）「江戸時代のQOL」

江戸時代の生活と、当時の日本人が理想としていた生き方を西鶴などの文学作品に表れる様々な人物像を手がかりに紹介し、現代日本人との相違と共通点を指摘する。さらに、西鶴の手法を摂取した現代文学作品をもふまえて、行き先を見失ったかに見える日本人にとっての江戸時代からの贈り物の大切さを論ずる。

担当者の変更のお知らせ（1998年5月22日）

多忙を理由に辞退される教員があったので、英文学の平井隆さんに交代をお願いした。

竹野先生（西鶴）は辞退されましたので、平井隆先生に、「ヨーロッパ古典世界の生活」について話してもらうことになりました。主にラテン韻文にあらわれた風景論、生命観と英文学への影響などという話になると思われます。

QOL研究会——担当教員の打ち合わせ（1999年2月7日実施）の案内から

認可が決定してから、初めての打ち合わせ会を実施した。本番では1時間で講義する内容のエッセンスを30分ずつ話してみる、という内容で実施した。

- ・各教員がどのような研究を行ってきたか、そしてQOLの現状と課題について何を考えているかを率直に語り合います。
- ・A4版横書き1～2頁程度で、上記の内容をまとめたものを準備し、10部コピーを作って当日持参してください。それとは別に最近の論文別刷りなどの閲覧・配付・宣伝などを歓迎します。
- ・ひとり持ち時間1時間とします。（30分発表、30分質疑応答）
- ・総合討論では、授業の進め方について相談します。

参加教員への案内（1999年4月9日）

いよいよ、新入生を迎えて、実施のための直前の準備に入った。

1999年度県立大学大学院「生命と生活の質特論（略称QOL）」の授業の方法について

目標

0. 大学院生と担当教員ともに活気のある大学院を創りだすための授業を!

いやいや、うんざり、義務感、お疲れ、眠たい、などとはもっとも遠い、わくわくするような時間と空間を作り出すことをめざします。そんな「わくわく」をこの授業から全学に、そして地域に伝染させましょう。

構想計画

1. 今年は、別紙のような方向で前半8コマ分の授業を集中講義のオムニバス形式で実施します。臨機応変に時間の半分は、参加者をまきこんだ討論とするつもりで準備しています。
2. オムニバスで実施する意図は、細分化・専門化する学問相互に橋をかけること、つまりタコソボの爆破にあります。
3. 活発で率直な意見交換の手本を教員が率先して示しますので、負けないように討論に参加して、自由な精神と学ぶ喜びを分かち合しましょう。
4. 具体的には、担当教員8名が、各自のもっとも得意とする分野を明確かつ印象的に手短かに提示し、そこからQOLをめざして一步踏み出した内容をもりこみます。なるべく複眼的にしかし深くQOLを見るということです。教員たちと大学院生たちのこんな組み合わせは、今、ここで初めて実現するものですから、それだけでも大変にユニークな授業なのだという自覚をもちましょう。
5. 門戸をひろく公開
さらに、この合宿授業に限っては、オブザーバーとしてあらゆる教職員の参加をも拒まず、むしろ積極的に求めるべきであるということにします。大学院担当以外の教員や地域の方々、マスコミ等にも扉を開いて、わが大学院(さらに学園)ではこのような教育・研究をめざすのだというひとつの先進的な事例の提示ともなれば、という願いもっています。
6. 出席と成績評価
やむを得ない事情で出席できなかった学生は、翌年再受講していただきます。合宿授業の成績は、出席の状況と積極的な発言による平常点プラス、特定の教員にあてたレポート(内容・形式は自由)をもって行なうことにします。あるいは、特定の教員に提出するのではなく、合宿授業終了時の討論の中で、ひとり3分程度のスピーチを行なうこと

でそれに換えることもできるというアイデアも検討中です。(後略)

別紙の内容は以下の通りである。

1999年4月23-24日実施 大学院QOL講義内容のあらまし

I部 QOLの危機を乗り越え、真に豊かといえるライフスタイルを見つけることがわれわれの急務である。

A イントロダクション。「生命と生活の質」を問うことは、われわれのライフスタイルを文明論的に問い直すことである。

(1)今我々がたどっている文明の破滅への道を抜け出すようなライフスタイルの模索が必要とされている。(市村)

(2)そもそも宇宙は混沌から混沌へと永劫回帰する。人類がほろびるのもひとつの必然であろう。

(コメント、戸崎)

B 心と体がさらされている危機的状況をいかに乗り越えるか。

1. 環境ホルモンをはじめとする生命と生活の未曾有の危機にどう立ちむかうか。

a 数億年かけてできあがったホルモンのシステムを攪乱する化学物質の波に我々の細胞はパニック状態に陥っている。(市村)

b そうはいつでも一度「簡単便利でスイッチポン」に慣れたわれわれが、簡単にそれを捨てられるだろうか。(コメント、鈴木)

2. 赤ちゃんの時にはみんながもっていたあるがままの自分を生きる笑顔をどうやって見つけていくか。

a 人間は多様。あるがままの自分を受け入れ、生活・人生を自分らしく過ごす時の笑顔。それがQOL。(三島)

b 「個性重視の教育」でいじめや不登校を防止し生命の大切さとしつけを重視する家庭教育の確立をと文部省は言っている。(コメント、安溪)

C QOLの豊かさが既存の経済学では測れないとしたら何で測ればよいか

1. 豊かさを測るための指標として一人あたりGDP等があるが、生命と生活の質は何で測ればいいのか。(松井)

2. アフリカの森の中で農耕民と漁民の物々交換

の市場を見たが、あれはGNPには無関係な豊かさだった。(コメント, 安溪)

II部 空間と時間軸をできるだけ広く深くとって、現在のわれわれの座標軸的な位置づけをしたい。

A 自然と文化の多様性がQOL理解の一つの鍵である

1. 伝統文化の智慧に学びつつそれぞれの地域にあった真の発展とQOLの向上を模索する必要がある。

a アフリカや屋久島の自然との共存の智慧に学んで、イバルナ学者、イバルナ日本人、イバルナ人間、と三省している。(安溪)

b インドの暮らしを見て「近代化しない方がいい」と発言するのは無責任だとネルーは警告した。(コメント, 戸崎)

2. 自然界のおどろくべき多様性に学んで、人間の生命や生活の質の問題を考える道がある。

a 「どうして自然はこんなにも多様なのだろうか」という驚きが僕の原点。多様性こそがQOLの本質。(鈴木)

b 確かに知の暴走が産みだした様々な問題を知性で解決するというシナリオは問題が多い。(コメント, 戸崎・三島・安溪)

B 現代の危機の克服のためにいにしえ人の智慧に学ぶ

1. 現代文明への古代ローマの人々の贈り物と警告。

a 古代ローマの農的な文明世界から我々の現代の生活を見る時見えてくる、様々な歪みを指摘したい。(平井)

b あの大明明がなぜ、いかにして滅びていったのかを、貿易立国をめざしたカルタゴの悲運などと重ね合わせて知りたい。(コメント, 安溪)

2. 人間の浅はかな自我や知性やアイデンティティでこの生命系と生活の崩壊の危機を回避できるか。

a 中世インドの考え方の凡我によれば私は変化する宇宙という環境の中にたまたま存在にすぎない。(戸崎)

b その考えをそのまま現在にあてはめると、何もしないでこのまま滅びればいいという無責任につながらないか。(コメント, 安溪)

III部 生と死の質をきちんと位置づけた医療や看護のシステム作りへの社会的な合意が必要である。

A 医療の現場では、2割の患者が8割の医療費を使っている。死をいかに受け入れるかの教育が必要。(岩本)

B われらはいかに生きるべきか、そしていかに死ぬべきか。(講話, 岩田学長)

学生による発表会のお知らせ(1999年4月20日)

教員によるオムニバス講義をいかに受け止めたかを、口頭で発表することでレポートに代えることができるという方法を考え、授業案内とともに教員・学生に配布した。

この授業は、学生主体の口頭発表の時間にします

5月22日(土)12時50分から17時40分まで

場所 本館3階 A32番教室(変更されています。)

6月5日(土)は予備日とします。(なるべく5月22日で終わりたいということです。)

合宿で8回分の授業をおこないますが、あと数回の授業をしないと2単位に足りません。そこで、残る授業は各研究科がそれぞれ独自におこなうという計画案を4月9日にみなさんに配布しました。しかし、その後担当教員で検討した結果、以下のような方式に改めてはということになりましたので、積極的にご参加ください。

学生が発表する学会形式の授業。教員は、聞く側にまわって、随時質問やコメントをします。オブザーバーの教員や、学部生なども自由に参加します。

そのとき、各学生がそれまでの担当教員8人の発表、議論、討論などに基づいて、反論とか、自分なりの考えを展開することを強く期待しています。もちろん、「生命と生活の質」をめぐる、授業では取り上げきれなかった新しいトピックも歓迎いたします。

レポートに代えて、15分程度の口頭発表をする学生あるいはグループを、4月25日の3時ころまでに募ります。先着10組程度と今のところ考えていますので、ふるってご参画ください。

具体的なテーマは、なるべく早く(遅くとも5月

10日までに) メールか、紙に書いて安溪のメールボックスまでお届けください。プログラムを作成して学内に周知しますから。

発表に必要な文献の探索や、議論の進め方などは、8名の担当教員に随時相談することができるものとします。修士論文の発表の練習にもなると思われます。進行係も学生につとめていただきます。

口頭発表しない学生は、5月31日正午までにレポートを大学院の事務室に提出してください。本文はA4版横書き原稿用紙を使用してください。あなたが読んでもらいたい担当教員ひとりの名前をレポートのはじめのところに大きく書いておいてください。内容は自由ですが、テーマについてはあらかじめ採点してほしい教員と相談することが望ましいと思います。採点は、それぞれの教員がおこない、合宿授業での参加内容の評価を加えて安溪が全体をとりまとめます。

口頭発表を選択された方は、120点満点、レポートの方は、100点満点で採点する予定です。積極的な参加を点数として評価するためです。

1999年5月22日(土) 学生による「私にとってのQOL」発表会(県立大学にて)

12:50-14:20 第1~第4発表

14:30-16:00 第5~第8発表

16:10-17:40 第9~第10発表 と全体の講評

「生命と生活の質特論」総合討論をめぐる大学院生の感想から

第1年目の大寧寺の合宿での終わりに、参加学生の印象をメモで提出してもらった。選択してコメントを付し、内容確認のため印刷して配布した。やや消化不良がめだつものの、新鮮であったという評価が多かったと思われた。

2日間にわたって、濃密な時間をもつことができました。大学院生の方々、担当教員・オブザーバー参加の方々に深く感謝申し上げます。教員以外では、国際交流員の金正和さんと、山口新聞の長門支局の方の参加がありました。岩田学長とご家族には、なにからなまでお世話になりました。ありがとうございました。

「目からうろこ」の2日間

◎今回の共通科目における「場所」「テーマ」「形式」すべてのプロデュースがとつてもマッチしていたように思います。先生方のいろいろな講義を受けながら、まさに、目からうろこが落ちたような思いがしています。(国際文化学専攻)

◎この2日間、私の頭の中はフルスピードで回転していましたが、ついていけませんでした。今もパニックしていて、考えがまとまらないどころか、何をどう考えていいのかわからなくなっているのが、正直な気持ちです。ただ、このような場所を与えていただいたことにより、多くの刺激を受け、自分の未熟さを痛感しました。大学院生の方々とも対面でき、よい交流の機会となりました。(健康福祉学専攻)

◎専門的な部分については難しく、理解しづらい部分もありましたが、2日間を通じて感じたことは「自分自身がどういう信念を持って生きるか」ということです。各々の先生方が、それぞれの信念を持って、研究や生活を続けておられることが、よくわかりました。(生活健康科学専攻)

◎今回のそれぞれの講義は、まさに目からウロコが落ちるようなものばかりでした。特に松井先生の新しい経済学の話は、とても新鮮でした。私は経済学について今まで納得できないものを感じていました。それはGDP、GNPの示す数値と、各人の心の満足度というのが、必ずしも一致しないのでは、という疑問があったからです。また、経済の本を読んでいても、心の部分がないがしろにされているような不快感を覚えました。しかし、新しい経済学が、心を含む、人間の全体を対象にしていることを知って、初めて経済学というものに、親近感を覚え、興味を持ちました。(国)

◎聞けば聞くほど人間ってなんだろ Quality of life って何?と疑問におもえてきました。それはこの2日間で出せる答えではなく、一生かかって見つけるものであるかもしれませんが……。そういう意味で問題意識をうえつけてくれた、QOLに感謝します。(国)

わたしはこう思う

◎先生方の話でも、「どこに質(価値)を求めるのか」は8人それぞれが、異なっていたと思います。今の世代だけでなく先の世代まで、普通に暮らせるように「(ありとあらゆる)環境に無理のない生活を」といったものを求められ、また自分自身にも求めているように感じました。物欲を満たし、精神的に満たされ、なおかつ環境にやさしく、ずっと先の世代のことまで考

えた生活というのは、すべて完全に欲求を満たすことは、まず不可能でしょうから、それぞれをいかに折り合いをつけて、折り合いを付けたものいかに自分が満足し、周囲を「おおっ」と思わせることができるか、というのが大切なのではないかと、思います。(健)

◎日頃考えていたことを、ブラッシュアップするよい機会でした。「生物の営みに見合う時間の流れへ」が、この2日間を貫く幹です。そして、地方分権と、自らのなわばりの見直しを、枝々の一部となりそうです。

(生)

◎QOLの解決の糸口は？「真」「善」「美」を実践する。知って行動する。意識・心が変わって行動する。心が動かなければ、行動はおこらないし、たとえ起こったとしても長続きせず、すぐ止まるでしょう。「これは変だな」と感じる感覚、心を磨くことが大切だと思う。それは、教育が(家庭、学校、社会、自信)大切だと思う。(国)

◎我が国ではいやでも、高齢化が進んでおり、高齢者の住みやすい社会、「高齢者のQOLを高める社会の創出」がそのまま、我が国民のQOLを高めることにつながるということが、わかった。(国)

◎Think in different ways, think differentlyが私の考えです。(国)

◎生命と生活の質とは、その人がいかに生きるかを考えていく上で、成立するものだと思います。個々人が、どこに焦点をあてて生きるのか。みんな違うのが当たり前で、都会がいいとか田舎がいいとか、農薬たっぷりの野菜を、食べるや食べないなど、本人の自由ではないでしょうか？ただ怖いのは、正確な情報なしに、または事実を知らずに、何かを選択し、それを最も良いことだと思込むことだと、思います。「何が生命と生活の質なのか」ではなく、それを高めるために何をすればよいのか、あるいは正確な情報を得るには、どうすればよいのかを、考えていくべきだと考えます。

(健)

◎少し物欲を抑えて、片寄っている分配の是正を考慮すれば、少なくとも日本の「ものの豊かさ」から開放されそうな気がします。(国)

◎M. ウェーバーは人間の行為の動機に「目的合理的行為」と「価値合理的行為」という2つの類型をあげています。目的合理的行為は資本主義の精神に通った、金銭合理主義や効率の原則などを、意味することになります。資本主義の経済自体が、不完全なものであります。「自然環境」や「人間の生命」の価値などを重視する「価値合理的行為」をもっと重視した人間教育

が、必要になるのではないのでしょうか。環境問題などに対するQOLを高めるには、高い環境税を支払うという国民的・国際的合意形成が必要になると思います。できればそういう税金を、誰が(先進国・途上国・企業・消費者など)、どの位支払うかという、科学的研究が出来ればよいと思うのですが。(健)

自覚と行動のための糸口として

◎QOLとは何か、その中身はどういうものなのかを考える時、ある一定のモノサシを設定すること、そしてそれは社会的な合意を得られうる内容であることを追求することは、大変危険な面を持っていると思う。すなわち大まかであれ一定の指標をつくった時、「それがあなたの生活は質が高い(近い)」「あなたの生活はいい」といったような、人間を選別する思想につながりやすいという点においてである。あくまでQOLは自分で自分のことを見つめる時に、用いるべきであって、他人に適用するものではない、と思う。(健)

◎日本の今の豊かさは、金があれば買えるが、逆に金がなければ、享受できないものに、つまり物質的なものに、片寄っているからです。過労死がめずらしくない社会が、QOLがいいわけではないです。我々はどのように変えることが、できるのでしょうか？知難行易です。(国)

◎ここで学んだことが、理論に終わるのではなく、実際の自分の生活に役立ててはじめて、この授業の実を結ぶことになるんだと、思います。できれば、自分を磨く良い機会となるように、努めたいと思っております。次回を楽しみにしております。どうもありがとうございました。(国)

未解決の疑問——locallyについて

◎Think locally, act locally. においてですが、自分が生活している地域のことを考え行動するのは、みんなが日常やっていることだと思います。身近なことだから、着目し考え行動することは、偏見を抱きがちになると考えませんか。またlocalで固まりすぎて、日本人が陥りがちの単一民族国家的思想を、その地域の集団・集団で持ち、集団間の争いなど起きる可能性が、出てくるとは思いませんか？act locallyで、安溪先生はフィールドワークを、世界中で行っていらっしゃいますね。それで、ある地域にいられるから、locallyなのですか？また、生活の質QOLは、やっぱり個人的な価値観のもとで、得られるものなのじゃないかな、と思います。欲のレベルも、個人差があると思います。

(国) ←今、think globallyと言われているものには、あまりにも多くの「まゆつば」「だまし」が含まれています。例えば、地球温暖化を原発で防ごうといった日本だけのキャンペーンとか、それを見抜く目を養いましょう、というのが、私の発言の主な趣旨です。ローカルな人同士が結びつきあい、世界中に友達がいる、ということが平和の本当のいしづえです。

◎いなかの暮らしがいい、とこんなにも文明化して工業製品にとりかこまれた日本人がいうのは、こっけいではないか。自らの足下を見つめるべき。(国, 安溪要約) ←おっしゃるとおり。南アフリカの劇作家のボンゲニ・ンゲマがニューヨークで「サラフィナ」を上演中に、新聞記者が「アパルトヘイト廃絶のために何かしてあげられることは？」と尋ねました。その返事は、「Clean your garden first.」でした。(安溪)

この講義の今後の課題

◎QOLはもともと貨幣には換算できない、生活の質を測定したいという欲求から提起された概念だと、記憶しているが、その中味はかならずしも、明確ではありません。一つは、貨幣的ニーズにたいする、非貨幣的ニーズをどのようにとらえ、生活の内容を充実させていくか、という観点からの議論があり、自然環境や河川や緑や生命の価値などを、数量化できないかという試みが行われています(NNW, 社会指標など)。自然破壊や生命の価値は、経済学の定義の中では、単なる使用価値として処理されてしまいます。つまり利潤追求の価値にはならず、無限大と考えられていますが、これは間違っています。自然破壊、自然資源は有限ですし、女性の生き残り、子育ての価値も、タダではなくなりつつあります。よって、経済学の定義の中に、このような価値を測定する部分がなければ、資本主義社会も、経済学も行き詰まることになると思います。松井先生には、こういう観点からの経済学理論の、再構築をお願いしたいと思います。(健)

◎数値で表現できない生活の質を、どのようなもので測ればよいのかを、ますます知りたいと思います。満足度の測定方法はなんでしょうか？(所属不明学生)

◎今回話題となった医療問題、ダイオキシンの(環境ホルモン)以外にも、考えることはあると思う。今回の話題はマイナスイメージのものばかりが、取り上げられているのが、不思議だった。確かにマイナスなものを、プラスにしたいのだけれど、質を、生きる喜びとか、そんな面からみてみたらどうかと思う。音楽、絵画などの芸術も、質になりえるのではないのでしょうか。

(国)

◎憲法25条[健康で文化的な最低限度の生活を営む権利の保証]とQOLの関係を考察して発言してもよかったのかな。(健, []は安溪加筆)

◎QOLというのは、社会福祉学部に行った時から、聞いたことが多い言葉で、主に障害者・児童・老人のQOLを高めるとは、どういうことなのか、どうケアすべきかについて、学んできました。今回の議論では、完全には言わないまでも、健常者スタンダードの議論であったような気がします。やはり、文化・文明や環境についても、もちろん大切だとは思いますが、ただ、「多角的に考える」とした時に、障害者などの社会的弱者の視点が抜けてしまうと、良くないかもしれない、ばくぜんと思いました。(健) ←来年への反省点です。ありがとう。議論の中で出していただければもっとよかったです。(安溪)

◎自分の考えは発表できるが、他の人の考えについて、意見を述べることは、むづかしい。debate形式のほうが、学生は意見を述べやすいのではないかと。(国)

会場の選定についての感想から

◎大寧寺は、講義の環境としては、大変良かったと思います。

◎大変自然が豊かで、美しいところで感動いたしました。

◎歴史あるお寺で、感激しました。

◎お寺の雰囲気は、勉強する・学習するという気持ちにさせてくれるものでした。お食事もとってもおいしかったです。

◎大寧寺……とても快適でした。食事がとてもおいしかったです。お世話になりました。

◎お寺での宿泊は久しぶりの経験でした。お世話になりました。(坐禅がなくて良かった)

◎終わる時間が早ければ、遠くてもいいです。

◎とても心地好い空間でしたが、1つだけ……。机をもっとランダムに(立ったり、すわったりetcできないと膝がこわれます)。

◎お茶やお菓子のあるところ、おトイレの前等人的集まる場所は禁煙にして、あまり用のない場所を、喫煙所として欲しかったです。咳き込んでかなりつらかったです。

◎食事も環境も、すべてが素晴らしかったと思います。ただ、寒かったです。とても。

◎質的にはこちらが最高ですが、距離的に近いところも魅力があります。



写真2 芝生の上での講義（2000年 徳地）



写真3 自然の中でリラックス（2000年 徳地）

◎セミナーパーク（鑄銭司）がよろしいと思います。交通の利便性、岩田学長先生のご家族に精神的に、負担をおかけしていると思います。（1999年5月27日）

2000年度の報告

ほぼ同じ講師の陣容と形式で実施した。会場は、徳地少年自然の家を選んだ。本学非常勤講師（生態学、生物と社会担当）の安溪貴子さんに依頼して、森の中でのワークショップを実施した。次に抜粋する学生の感想を読むと、QOLの講義を座学中心でなく、自然の中でおこなうことの意味がはっきり伝わってくる。

林を歩く

◎木と、光（太陽）のパワーでおちついて、きもちよかった。またこようーと。

◎何も考えず、自然とふれあうのもいいと思った。

◎「疲れた時にはもりへ。」は、とても効果的だと思いました。自然はすばらしいもので、人間は大きな自然の中で生かされている、小さな存在だと感じました。

◎山の散策では、若い枝や植物たちが空に向かって、まっすぐに伸びている姿を目にして、生への躍動を感じました。春になると植物たちが芽を出し、伸びていく。このことは小さい頃から知っており、当然のことだと考えていましたが、目の当たりにし、いろいろな思いが込み上げてきました。うまく言えませんが、力を得た、そんな気がしています。

◎森に入り、木を選び、その木と話し、下から緑の葉を見上げる。優しさが、確かに体の中に、伝わってきた。

◎自然の中に身を置いてみることで、気持ちに余裕ができたような気がします。このような時間を常に持てるのが、一つのhigh quality of life かも知れないと

思いました。

◎芝をコロコロ転げることができた。いつもと異なる自分を感じることが出来て、良かった。笛の音に、心が素直になれ、自然の世界に入りやすかった。

◎森の中に入って、あんなにゆっくり散策したのは、生まれて初めてのことでした。天気もよく、すごく気持ちよかったし、貴子さんのインフォメーションにあったように、木のパワーでは、すごくリラックスできました。ありがとうございました。

木にもたれかかって、の～んびり。でも、どこかで明日からのいそがしさ（現実）を知っている私がい。でも、いいんだもん。今さ、今を浸っていよう！てなワケでグッスリねむってしまいました。20分がとっても充実した時でした。ありがとう！

◎久しく考えたくないと思って、考えないようにしていた人のことを、落ち着いて考えることができた。あんな時を毎日、ちょっとずつ持てたら、人に対する対応とかも、もっと良い方へ、変わっていくのかもしれない。

木に触れる

◎自然の中にいるって、本当に気持ちがいいですね。声にならない声も、聞こえてくるような気がします。私達の暮らしも、こういう自然と調和する形でできたら、ステキだと思います。木の形、風に揺れる小枝、葉、木もれ陽、何もかもが、心をリラックスさせてくれます。なのに現実の生活は、便利さを優先させる形で、営まれています。だからこそ、こういう自然の素晴らしさが、こころにしみるのでしょか。

◎きょうは、木からの音を聞きました。信じられないほどなんですが、けれどもほんとうのことです。人間と自然の関係はなんだろうかということ、再び考え



写真4 おさなごころの遊びを楽しむ

なおします。われわれ人間は、自然からいろいろを恵まれて来たんですが、自然からの力をもらえるかどうか、意識的ではないでしょうか。人間と自然は、いつか一体になることができるか、「一体」とは今よりもっとお互いに保護することなんです。はじめて、日本の遊びをやりましたが、たのしかったです。

◎一番感動したのは、上を見上げた時に木が、そして木の枝が、風に揺られてそよいでいるのを見た時。周りの木たちと一緒に、何かを話しているような感じがしました。ただ木に抱きついていただけなのに、すごく心安らぐ。自然の偉大さを感じる事が出来ました。普段、昆虫を見ても何故か、どこか嫌悪感を感じるのに、今日は自分と一諸だなあ…という、不思議な一体感みたいなものを、感じました。

◎自分の心が弱った時には、ぜひ木や植物に触れて、話しかけてみます。

◎森の神様に話しかけるのは、変な気がしますが、よく考えてみれば人と会った時に挨拶をするように、当たり前のことなのかもと、思いました。

おさなごころ

◎花いちもんめのと時のみんなの笑顔！三島先生の講義と重なって、よく理解できました。みんなが、あんな笑顔でくらせていければいいのに！

◎花いちもんめをしているとき、みんな子供の笑顔になっていることに、気づきました。私も、自然とニコニコ顔になっていました。自然の中が、こんなに気持ちいいものだという事を、すっかり忘れていたようです。木とふれあっている時、木にも“血液”が流れているように思え、人間と自然は共存していることを実感でき、とても有意義でした。忙しい日々で疲れたら、また森を訪れたいです。

◎「花いちもんめ」を約12～13年ぶりにやりました。

◎日常生活において、私達の心にはゆとりが少なく、ストレスもたまりがちで、常に時間に追われていると、思いがちです。でも、実際はそうではなくて、自分たちが自分自身の心のゆとりをうばいとして、追い込んでいるのかもしれませんが。たまにはそんなこと忘れて、自然の中に身を置くのは、大切なことかもしれないと、そんな気分になりました。

◎ここ最近ゆっくりと自然の中で、遊ぶことがなかったので、今日はよい経験になりました。自然遊びも、もう20年位前の話なので、童心に帰れることで、QOL値が上がったような気がします。

◎最初はとても寒かったけど、途中で花いちもんめをして、体があたたまって、楽しかった。楽しいと感じることができて、うれしかった。

壁を越えて

◎文系、理系の壁を越えることの重要性が、この講義でわかりました。来年は何故、この多角的な視野が必要なのかを討論できる場を、教授、院生、その他、交えてやれたらおもしろいです。

◎大学の教授の話がこんなに、おもしろいものと気付くのがおそくて、後悔しています。でもこれからは、おもしろい瞬間を逃さない、つかまえるために学んで行きます。

引用文献

安溪遊地編著、1993『いのちと環境』山口大学総合コース講義録第7号、山口大学教養部「いのちと環境研究会」発行。